

スペシャル・ブレンド・ミステリー

謎

009

綾辻行人_{=選}

日本推理作家協会_{=編}



講談社
文庫
講談社
文庫



講談社文庫

綾辻行人 選
スペシャル・ブレンド・ミステリー

謎009

日本推理作家協会 編

講談社

あやつじゆきと せん
綾辻行人 選 スペシャル・ブレンド・ミステリー 謎 009

にほんすいり さつ かきようかい へん
日本推理作家協会 編

© Yukito Ayatsuji, Nihon Suiri Sakka Kyokai 2014



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2014年9月12日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277914-2

目次

序文……………	今野 敏	5
我らが隣人の犯罪……………	宮部みゆき	7
裏窓のアリス……………	加納 朋子	79
爆 ^は ぜる……………	東野 圭吾	123
杜 ^{かきつばた} 若の札……………	海 渡 英 祐	189
過去が届く午後……………	唯 川 恵	239
日光写真……………	都 筑 道 夫	265
ドア↑ドア……………	歌 野 晶 午	281
砂蛾家の消失……………	泡 坂 妻 夫	341
解説……………	綾 辻 行 人	398
選者……………		



講談社文庫

綾辻行人 選
スペシャル・ブレンド・ミステリー

謎009

日本推理作家協会 編

講談社

目次

序文……………	今野 敏	5
我らが隣人の犯罪……………	宮部みゆき	7
裏窓のアリス……………	加納 朋子	79
爆 ^は ぜる……………	東野 圭吾	123
杜 ^{かきつばた} 若の札……………	海 渡 英 祐	189
過去が届く午後……………	唯 川 恵	239
日光写真……………	都 筑 道 夫	265
ドア↑ドア……………	歌 野 晶 午	281
砂蛾家の消失……………	泡 坂 妻 夫	341
解説……………	選者 綾辻 行人	398

序文

一般社団法人日本推理作家協会

理事長 今野敏

『スペシャル・ブレンド・ミステリー 謎 009』をお届けいたします。

『ザ・ベストミステリーズ』と題されたアンソロジーをご存じでしょうか。年間のベストミステリー短編を^{へんさん}編纂して出版されているものです。

『スペシャル・ブレンド・ミステリー 謎』シリーズは、ある特定の年の『ザ・ベストミステリーズ』から、一人の選者が、趣向を凝らして編纂する珠玉のアンソロジーです。

今回は、綾辻行人さんが、一九七八年、一九八八年、そして一九九八年の『ザ・ベストミステリーズ』からスペシャル・ブレンドをしてくださいました。

綾辻さんは、皆さんもご存じのとおり、すばらしい書き手ですが、同時に優れた読み手でもあります。私は、江戸川乱歩賞や、その他の文学賞の選考会で、綾辻さんと

ご一緒したことがあるのですが、ずいぶん楽しい選考会だったことを覚えています。

綾辻さんのミステリーに対する眼差しは、厳しく、なおかつ包容力がああります。へえ、そういう読み方もあるんだ、とずいぶん勉強になったものです。

その綾辻さんが満を持してブレンドした短編集です。おもしろくないはずがありません。自信を持っておすすめします。

ちなみに、今回選定の対象となっている一九七八年は、私が小説家デビューした年で、私個人にとっても、思い入れの深い短編集となりました。

009という数字もいいですね。

お楽しみいただきたいと思います。

我らが隣人の犯罪

宮部みゆき

1960年東京都生まれ。'87年「我らが隣人の犯罪」でオール讀物推理小説新人賞を受賞し、デビュー。'92年『龍は眠る』で日本推理作家協会賞、同年『本所深川ふしぎ草紙』で吉川英治文学新人賞、'93年『火車』で山本周五郎賞、'99年『理由』で直木賞、'07年『名もなき毒』で吉川英治文学賞など受賞歴多数。

I

僕たちがとうとう自力救済に乗り出したのは六月半ばのことだった。

僕の名は三田村誠。中学一年生だ。成績も身長も中ぐらいだけれど、成績の方は後ろから、身長の方は前から数えた方が早い。たまに、せめてこれが逆だったらいいなと思うことはあるけれど、悩むほどのことはない。

父さん、母さん、妹の智子、そして僕の一家四人は、東京都心から電車で三十分ほどのところにある「ラ・コーポ大町台」に住んでいる。ここには三世帯が入居できるタウンハウスが六棟建ち並んでいて、僕たちが住んでいるのはその三号棟の中央だ。

一家でここへ引越してきたのは、半年ほど前のことだ。父さんと母さんが、共働きしていたコンピューターのソフトウェア開発会社から独立して、新会社をつくることになった。必然的に社宅から出なければならぬ。両親は、あの重たい住宅情報誌を毎週買ってきては、フェルトペン片手に首つぴきでよさそうな物件を探し続けた。

僕たちはどうも、あまり運のいい一家ではないようだ。都内の新築マンションには片っ端から応募したけれど、抽選で全部はずれ。仕方なしに中古物件に狙いをかえて

からも、「これ！」と思った目ぼしいものをいくつもタッチの差で逃してきた。そのうちに、僕はいささか両親の能力に疑問を感じてしまった。こんなに足回りが悪くて、競争の激しいソフトウェア業界でやっていけるのかしら。

それはともかく、最終的に落ちついた場所がここ「ラ・コーポ」だったというわけだ。もちろん中古で、以前にここに住んでいた一家は新築で入居して半年でここを手放したのだった。転勤なんですよ、という話で、別に殺人事件などのいわくつき物件というわけではない。両親はすぐに手付金を払って——それまでの貴重な苦い体験で、不動産を手にするには一にも二にもスピードが肝心とこたえていたんだらう——翌日には本契約を結んでしまった。ラ・コーポ三号棟の中央部屋は僕たちの新しい家になった。

住宅情報誌を見て、これほどたくさん物件が出ているのに、なおかつどの物件にも買い手がつくことに、僕は素朴にびつくりした。熱心に見ていると三ページくらいで目が疲れてしまうあの細かい一覧表の行間から、「うちが欲しいうちが欲しいうちが欲しい……」という無数のつぶやきが聞こえてくるような気もする。なまじな怪談よりよっぽど怖い。

競争に勝って、何とかラ・コーポへの入居が決まったとき、僕たち一家はちよつと

野蛮なくらいに喜んだ。なんと言つても都心まで通勤時間が三十分というのは素晴らしいメリットだし、僕たちの住む三号棟は、ラ・コーポに隣あわせている小さな自然公園と柵一つへだてているだけで、窓からながめると、山のロッジのようにすつぽりと緑に囲まれた感じがする。とうとう僕らにもツキがまわってきたんだと、そのときは思つたくらいだ。

ところが――

僕たち一家の右隣には、橋本美沙子という三十歳ぐらいの女の人に住んでいる。引越しの挨拶に行つたとき、

「ここは全部分譲だろう？ 独身の女性が自力で買うなんて、いくらローンにしても大したもんだな」と言う父さんに、

「自力じゃないわよ。そんなことありつこないでしょう」ちよつと馬鹿にしたように母さんは言つたものだ。

そのとおり。橋本美沙子さんは、まあ、ほかの男性からタウンハウスを買つてもらつて住んでいる身の上なわけで、その程度のことは、母さんほど鋭くない僕でも、体格のいい中年の男の人が、時々隣を訪ねてくるのを見かけうるうちにわかるようになった。

もつとも、両親がそれを知って心配したほどには、僕も妹もそれで悪影響を受けるということはない。テレビでも雑誌でももつとすごいことをやっている。隣の家に「特殊関係人」が一人や二人住んでいたって——そりや多少は興味をそえられるけど——それで「健全な発育が損なわれる」なんてことはない。

ただ、僕としては、僕たち兄妹を育て、会社を運営し、家のローンを払うためにいつも過負荷の状態になっている両親と、平日の夜や時には土曜の午後などに、大型のベントをスリと乗りつけて、愛人と楽しむためにゆうゆうとドアの向こうに消えていくお腹の出かったおっさんを見比べて、いろいろと考えさせられたのは確かだ。

つまり、世の中には不公平なことなどいくらもあるってことを。先生も親も「努力しなさい、努力すればむくわれる」なんて言うけれど、言っているその声に今いち力が入っていないのは、大人たちの暮らしの周りにも、似たようなことがたくさんあるかなんだろう。それと知らずに「努力しよう、努力すればむくわれないことはないんだ」と真に受けて育ってしまうと、大人になってから、自分を振ってもつといい給料をもらってる男と結婚しちゃった元恋人を殺してボストンバッグに詰めて捨てちゃう、なんてことになってしまうわけだ。

だからと言って、僕が両親を尊敬してないわけではない。両親だけでなく、こんな割りの合わないことの多い世界で一生懸命働いている大人はみんな偉いと思ってる。面と向かってそんなことを言ったら大目玉をくうに決まっているから黙っているけれど。

ともあれ、ラ・コーポで僕たちを悩ませたのは、橋本美沙子さん自身ではなかった。

橋本さんは犬を一匹飼っている。まっ白なスピッツで、名前はミリー。もつと別の状況で——たとえば町中を散歩させられているとか、スーパーの中で飼い主の腕に抱かれているとか——見るならばたぶん、わあ可愛い、で済んでしまうタイプの犬なのだけれど、隣人としてはどうしようもないやつだった。引っ越したばかりのころ、一晩だけ泊まりにきたお祖母ちゃんは、実に率直に「隣のババタレ犬」と表現していた。

ものすごくうるさいのだ。

ミリーが吠^ほえ始めると、僕はいつも古い戦争映画に出てくる機関銃を思い出す。けっして、現代戦映画に登場するパルスライフルやスマートガンのような音ではない。もつと原始的でカンにさわるのだ。しかも、断続的にはあるけれど、しょっちゅう

吠えている。どこにあんなパワーが秘められているのだろうと思うほどだ。

飼っている本人だつてうるさいだろうに。それがまず、僕たち一家が呆れかえりながら抱いた感想だった。僕は、橋本さんはひよつとして耳が不自由で、用心のために番犬を置いているのかもしれないと思った。そんな好意的な解釈も、ある晩、僕が友達から借りてきたLPレコードを夜遅くまで聴いていたら、彼女に「うるさい！」と壁越しに怒鳴られたという散文的な出来事でパツと消えた。

テキは本気で飼っているのだ。それが迷惑犬だなんて考えてもいないのだ。

僕の両親は、僕が言うのもへんだけれど、とても真面目な人達だ。ミリーの放つ遠慮のない騒音について苦情を言いにくくにも、まず管理規約をちゃんと確かめてからにした。そして、わざと最後まで読ませないようにしているのか、ごみみたいな小さな字で印刷されている規約の最後の方に、「ペットの飼育は原則として禁止」というくぐりを見つけた。

これは当然のことだと思う。タウンハウスというと聞こえはいいけれど、要するに西洋棟割長屋（これは父さんが親戚に新居の説明をするとき使った言葉で、そのとき僕もその意味を教えてもらった）なわけで、大きな一戸建を内壁で仕切って複数の世帯が入居しているのだから、外壁と屋根はもちろん、中央の世帯は両側の世帯と内壁